



東北五大夏祭りの一つ  
 「盛岡さんさ踊り」が誕生してから、  
 今年でちょうど30年。  
 その伝統を、様々な形で  
 支え続けてきた人たちの  
 物語をお届けします。



「さんさ」群像

特集・盛岡さんさ踊り30周年



盛岡の今年の夏は  
 例年以上に熱くなります

「盛岡さんさ踊り」は、旧南部藩領に伝わる盆踊りの一種。起源については諸説ありますが、もっとも一般的なのが、市内名須川町にある三ツ石神社の神様が城下を荒らす鬼を退治した際に、里人がちが三ツ石のまわりをサンサ、サンサと喜び踊ったことが始まりとされる「三ツ石伝説」です。

もともと地域ごとに伝承され、振りや舞目が異なっていたのですが、昭和93年、振り付けを統一して「盛岡さんさ踊り」とし、8月2・3日の夜、市内中央通りをパレードするようになりました。

30周年の今年は、ギネスブック登録に向けてのイベントや開催期間延長を予定しており、例年以上に熱くなるのが期待できます。





【城下町の賑わい】



盛岡藩は初め十萬石、後の1808年に二十萬石に増加され、城下町はそれに伴い二十三日から増えて二十八町(丁)として整備された。人口は1685(貞享二年)の調べで、町人が二萬三千人、武士階級を含め三萬四千人と推定される。町は「五の字」と呼ばれるクランクや袋小路の多い町割りがあるが生まれる事と、城の警備のために通りが見通しが利かないようにしたためと言われる。町名は職業や市の立つ日が多付けられ、賑わいを見せた。

【盛岡の清水】



街の中を流れる北上川と中津川お城の周りの堀跡の池など、水の恵みを感じさせる盛岡の街、かつては「十大清水」と呼ばれる清水が点在し、暮らしに活かされていた。十大清水は、黄金清水・箱清水・洞清水・岩清水・御田屋清水・毘沙門清水・大清水・コケ清水・大慈清水・青龍水。この中の御田屋清水・大慈清水・青龍水が特に「三清水」と呼ばれ、名水の誉れが高かった。この三つに料亭「大清水多賀」の中に湧く大清水を加えた四つの清水が、現在も飲まれている。

【盛岡の馬事文化】



馬事に通じていた初代南部元行公が、800年前に三戸を中心としたこの地域を治めてから、南部と馬は切り離せないものとなった。優れた農耕馬や軍馬の産地として、国内はもとより、明治11年にはパリ万博にも出品された。市内には馬町・新馬町・馬検場等、馬にまつわる旧地名や建物もまだまだ残っている。特に南部曲がり家の構造が示すように、この地域は馬と人の暮らしが近かった。6月に行われるチャグチャグ馬コは、愛馬を誇る精神から生まれたといわれる。

【歴史的建造物】



盛岡の建造物で国指定の重要文化財は、中の横近くの「旧盛岡銀行」と「旧第九十銀行」、中央公民館にある「旧中村家住宅」、岩手大学内の「旧盛岡高等農林学校」。そして単立博物館の敷地内に建つ「孝義基氏家二棟の六つ。中の棟の二棟の銀行は距離も近く、近代化の進む明治時代に、この辺りが金融・経済の中心地として熱いがあったことを物語る。また、県公会堂と日比谷公会堂、盛岡銀行と東京駅など、国内の重要建築の試作的な要素があることも興味深い。

ご近所同士の会話があるでしょ。気持ちもちがってホッとするのよね。だからこそ、中高年の姿ばかりが目立つこの町を、若い人が戻りたくなるような魅力的な町に変えたい。そんな願いから、イベント時には抹茶と菓子を提供する「町家サロン」として参加し、協力しています。

「使う心」を伝えたいのだから。4年前、教室の建物を、元々の造りや趣を活かしながら改築した時、「古い家もこんな風に生き返るんだね」と町内の人に驚かれました。心なされたというエピソードは、そんな吉田さんの想いの象徴といえるでしょう。現在吉田さんとご主人の間では、鈍屋町への転居の話が進行中。「ピッピ手芸教室」が常時開校・開店となる日は、そう遠くなくそうです。

# 暮らしと文化を体感する



盛岡町家の暮らしを通して「古い物を大切に使う心」を伝えたい

手芸教室主宰  
吉田真理子さん

盛岡城址の南東部に位置する約屋町には、南部藩時代の住居「懸「町家」が今でも残っており、城下町・盛岡の面影を現代に伝えていきます。町家とはその名の通り町人の住居で、間口が狭く奥に細長い空間である。表から裏に向かって土間が通っている。その土間に沿って番屋や坪庭、土間などが配置されている。といった特徴。町家そのものは全国各地に残っていますが、盛岡に残る町家には二階の軒先が引つ込んでいたり、屏風や戸袋と木格子の外観など、個性豊かな点が少なくありません。そこで市民の間から、そんな貴重な「盛岡町家」や清水が湧く共同井戸などが残る

## もの識り検定 Q

江戸の大火などが密集している城下町に火事は付き物。盛岡でも何度か大きな火事が発生し、城下町を焼いています。明治17年、馬場小路の監獄から出火した火災は、河南地区に燃え広がりました。しかし、ある一軒の商家が備えていた防火設備のためにその火を食い止めることができましたと伝えられています。現存するその商家とはどこでしょう? ヒント:白壁の美しい商家です。

(A) 本陣屋本店  
外壁と屋根や土間にいた防火設備が今も残っています。

盛岡の町家は、「ろーじ」と呼ばれる土間沿いに表側(通り側)から「見世」「常居」「座敷」と3間続き、坪庭・蔵を経て裏に抜ける造りになっています。3間の中でも特徴的なのが「主人の間」とされた吹き抜けの「常居」で、その高い天井近くには神棚が供えられるなど神聖な場所だったようです。残念ながら吉田さんの実家では、家業の都合で「常居」が改築されましたが、吉田さんのお母さんが所有者という教室の建物には吹き抜けの間が残り、盛岡町家の名残をとどめています。

月に一度東京から盛岡に通うようになってから、鈍屋町をあらためて「いい町だなあ」と感じるようになったという吉田さん。「だっておいし湧き水があるし、道路の幅が狭いから